



ハロウィンにひそむ^{けもの}獣たち

ノプロプス
noprops / 原作

くらだけんじ
黒田研二 / 著

すずらぎ
鈴羅木かりん / イラスト

卓郎

東部小学校の五年生。頭の回転が早く、決断力と行動力がある。頼れる存在。

ひろし

北部小学校の五年生。小学生とは思えない、洞察力と知識がある。なぜ解きが得意。

たけし

南部小学校の五年生。お調子者で臆病。でも、誰よりも友達思いのイイヤツ。

タケル

ビション・フリーゼという種類の犬。大切な人々を助けるために、怪物と勇敢にたたかった。人間の言葉をすべて理解しているという事実を知ったひろしの提案で、モールス信号を応用し、言葉を伝えられるようになった。

美香

東部小学校の五年生。幼なじみの卓郎と、いつも一緒にいる。運動神経バツグン。



怪物



ブルーベリー色の巨人。人間を見るとおそいかかってくる。ひろしたちはこの夏、「ジェイルハウス」などあらゆる場所での怪物に遭遇したが、犬が苦手であることや、頭が重く泳ぐことができないなどの弱点を突くかたちで、なんとか魔の手を逃れてきた。宇宙から飛来した物質・ブルースターの中に入っていた虫「パラサイトバグ」が体内に入ることが原因で、人間が怪物に変異する可能性があることがわかってきた。

マロン

シズーという種類の犬で、女の子。美香の家で暮らしている。



ナオ

北部小学校の五年生。ひろしのクラスメイトで、クロさんとは伯父・姪の関係。



ハルナ先生 せんせい

ひろしが通う北部小学校の教師。親友のユズキをはじめ、生徒たちが多数失踪し、閉鎖されることになった碧奥小学校の元・生徒でもある。クロさんの悪事を知り、ひろしたちに協力してくれる。



クロさん

怪物のことを「ブルーデーモン」と呼び、宇宙から飛来したブルースターを集め、この世界をブルーデーモンだらけにすることをもくろんでいる。自らもブルーデーモン化できる能力を得た。



ユズキ

ハルナ先生の同級生として碧奥小学校に通っていたが、パラサイトバグを誤って口にしてしまい、ブルーデーモンになった。現在は力をコントロールできなくなるようになり、人間だった頃の姿にも変身できる。



目次もくじ

- 1 〈まんぷく食堂〉にて 006
- 2 クロさんの忠告 018
- 3 サーカス団がやってくる！ 025
- 4 へこんだシャッターと
曲がったステッキ 035
- 5 おじさんの正体 044
- 6 サーカスへようこそ！ 052
- 7 ドキドキの空中ブランコ 065
- 8 ピエロのつなわたり 076
- 9 ハロウィンの動物園 086

- 10 動物園の怪物 097
- 11 ベンガルトラを追え！ 109
- 12 クロさんのたくらみ 119
- 13 林の中の大冒険 127
- 14 マユさんとマイキー 139
- 15 ハロウィンパレードと
デモの二団 148
- 16 開演直前 159
- 17 あやしい人かげ 170
- ひろしによるなぞの解説 179

1 〈まんぷく食堂〉にて

〈まんぷく食堂〉の向かい側は空き地になつている。

たけし君の話だと、つい最近までそこには雑貨を売つているお店があつたそうだ。

ここ数年、開店休業の状態が続いていたらしいのだけど、去年ついに店がとりこわされ、住んでいた人たちもどこか遠くへ引つこしたという。今はただつ広い空き地になつていた。

雑草がのびまくつたその場所に、真っ赤な軽自動車が停まつている。ぼくが〈まんぷく食堂〉へやつてきたのは、今から十分ほど前だが、そのときから車はそこに置かれていた。

だれの車なのかはわからない。たけし君も、たけし君のお父さんも心当たりはないそうだ。このあたりでは見かけない車だとも話していた。

ぼくは店内からちらちらと外の様子をうかがい続けている。赤い車は今もまだ停まつたまま。車の持ち主がもどつてくる気配はない。

なぜそんなにも、その車のことが気になるかというと、助手席にちらりと生き物の姿が見えたからだ。

身長五十センチほどの小さな動物だった。車のウインドウには黒いフィルムがはつてあつたため、車内の様子はあまりよくわからなかつたが、毛むくじやらの真つ白な小動物がそこにいることは確実だつた。

西日が車を照らしている。十月も終わりに近づいたとはいえ、まだまだ暑い。あれだけ太陽の光が射しこんでいれば、車内は相当の温度になっているだろう。留守番をしている小動物が熱中症になつていないか、ぼくは心配で仕方がなかつた。

いや、心配ごとはそれだけじゃない。

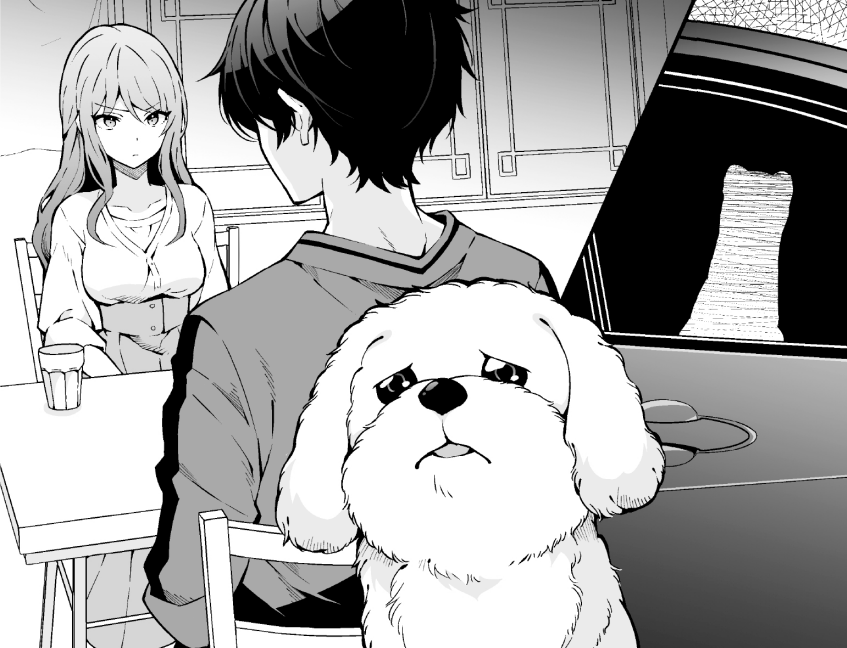
窓から店内へと視線を移す。

午後四時。

開店前の〈まんぷく食堂〉には、それぞれ別の目的で訪れた三組五名——ぼくをふくめれば六名——の客が集まり、おたがいのことを気にかけてながらぎこちなくお茶を飲んでいた。

入り口近くの丸テーブルで向かい合つて座つて居るのはクロさんとハルナ先生。どちらもかた苦しい表情で、なにやら深刻そうな会話を続けている。

カウンターの奥でお皿をみがいているたけし君の話によると、今から三十分ほど前、ふたりはいつしよにやつてきたらしい。



「ハルナ先生。クロさんにいきなり呼び出されたらしいぞ」

ひろし君にそう耳打ちするたけし君の声を、ぼくははなれた席からぬすみ聞きしていた。

クロさんはぼくたちの敵だ。何度ひどい目にあわされたかわからない。ハルナ先生はクロさんに手ひどく裏切られたことで、心に大きな傷を負い、いつときは学校を休んでいたこともあった。

それなのに、クロさんのさそいに軽々たのつてしまうなんて、一体どういいうつもりなのだろう？

「店はまだ準備中だったから、父ちゃんはいったん断ったんだけど、ハルナ先生に『少し

だけこの場所を貸していただけませんか？ 安心して話のできる場所がここしか思い当たらないか
つたものですから』つてお願いされちゃつて」

なるほど。ハルナ先生もそれなりに用心はしているみたいだ。

どこにクロさんの仲間がひそんでいるかわからない。もしふたりでカフェに入ったとして、その店の店員が実はブルーデーモンだという可能性だって十分に考えられる。その点、へまんぶく食堂なら安全だ。たけし君のお父さんは信用できる人物だった。

ハルナ先生たちが「へまんぶく食堂」にやってきた理由はわかった。でも、いまさらクロさんとハルナ先生でなにを話し合うというのだろうか？

ふたりの会話が気になって仕方がない。

そして、それはカウンター席でジュースを飲んでいるひろし君とナオちゃんにしても同様だった。

ふたりはだまつてジュースを飲み続けるばかりで、ほとんどしゃべろうとしない。ひろし君とナオちゃんの間にはずつと、重苦しい空気が流れ続けていた。

「……モー、元気になつてよかつたね」

ストローから口をはなして、ナオちゃんがようやく言葉をつむぐ。

「そうですね」

ひろし君は今にも消え入りそうな声で相づちを打った。

モーのことなら知っている。北小学校周辺をなわばりにしているまだら模様の野良ネコだ。ぼくも散歩のときで何度か顔を合わせたことがあった。この前の月曜日に事故にあったと聞いて心配していたが、ふたりの会話を聞く限り、どうやら無事に回復したらしい。

ネコが元気になったなら、それはめでたいことなのに、ふたりともどうしてそんなにかない表情なのだろう？

「んもう、元氣出してつてば」

ナオちゃんも口をとがらせる。

「僕はいつでもどおりですよ」

うつむいたまま、ひろし君は答えた。

「なにがあつたか知らないけど、オレの作ったオリジナルジュースを飲めば、なやみごとなんてどこかへふつ飛んじまうよ」

洗った皿を洗いながら、たけし君がいう。

「ねえ。このジュース、ちょっとあますぎない？」



ピンク色の液体が入ったグラスを持ち上げ、ナオちゃんがまゆをひそめた。
「わかってないなあ。そこがいいんじゃないか」
「これ、グラブジャマンのシロップを使っていますね」



グラスにほんの少し口をつけたあと、ひろし君は表情ひとつ変えずにいった。

「さすがひろし。よくわかったな」

「グラブ……なに？」

ナオちゃんがひろし君に顔をよせる。

「グラブジャムンはインド発祥のおかしです。丸いドーナツをシロップづけしたもので、世界一

あまいといわれています」

「ひろし君は食べたことあるの？」

「昔、イタリアに住んでいる僕の祖父がお土産に買ってきてくれたことがありました。日本でも

缶詰にされたものなら比較的かんたんに入手できますが」

「ちよつと待って。ひろし君のおじいさんってイタリアに住んでるの？」

「ええ、イタリア人ですから」

ひろし君はさらりとおどろきの発言を放つと、グラブジャムンという名前の由来について饒舌

に語り始めた。

たけし君もナオちゃんも呆然とした様子で、ひろし君の顔をながめている。たぶん、グラブジ

ヤムのうんちくは頭の中を素通りしているにちがいない。ふたりの頭の中は「おじいさんはイ

タリア人」というパワーワードでいっぱいになっているはずだ。

「ちなみに、インドにはほかにあまいおかしがあつて……とくに有名なのはインド版のかりんとうと呼ばれているジャレビでしょうか。あざやかなオレンジ色をしていて、インドではお祝いごとなどがあつたときに——」

「ねえ、ひろし君」

ナオちゃんはなにかしやべりかけようとしたけれど結局、言葉のみこんでしまった。ほつとしたような表情をうかべ、熱心にしやべり続けるひろし君の横顔をながめている。いつもどおりのひろし君にもどつて、安心しているようにも見えた。

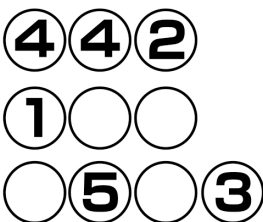
「どうもすみません。お待ちせしちやつて」

厨房からまんぶく食堂のご主人——たけし君のお父さんが現れ、ぼくのそばへとやつてくる。「本当はこちらから出向かなくちやいけないのに、申し訳ないです」

「いえいえ。とんでもない」

窓際のテーブルに座り、それまで湯気のたつ緑茶をすすっていたばかりのお父さんは、姿勢を正していつも持ち歩いてある黒いビジネスバッグから書類を取り出した。

「こんな感じになりますかよろしいでしょうか？」



こた
答えは ①②③④⑤

お父さんとふたりきりでまんぶく食堂を訪ねるのは初めてだ。お父さんは、たけし君のお父さんに仕事をたのまれ、ここまでやってきたのだった。

お父さんが仕事にぼくを連れていくことはめつたにないのだけれど、たけし君のお父さんがせひともぼくに会いたいといつてくれたらしく、ぼくは散歩がてら、長い道のお父さんといっしょに歩いてきたという次第。

ぼくはお父さんのひざの上に飛び乗り、行儀が悪いとわかっていながら、テーブルに前あしをかけてテーブルの上に広げられた書類をのぞきこんだ。中央に真っ赤なハートが大きくえがかれている。

「……ハート？ 恋に関するものでしょう

か？ ロマンチックですね」

たけし君のお父さんがいう。

なぜか、ナオちゃんがぎよつとした表情でこちらを見た。

「……うーん、難しいなあ。さつぱりわからない」

たけし君のお父さんはあごに手を置き、しきりに首をひねる。

「なんですか、それは？」

眉間にしわを寄せたたけし君のお父さんの背後から、ひろし君がぬつと顔を出した。

「うわ、びつくりした。おどかすなつて」

さつきまでカウンター席でジュースを飲んでいたはずなのに、ひろし君はいつの間にかそばにいたのだろうか？ 足音も立てずにしのび寄るなんて、まるで忍者みたいだ。

「明日はハロウィンだろ。うちの店もハロウィン用の特別なイベントをなにかしたいなと思つて、お客さんへのプレゼント企画を考えたんだ」

そう答えたのはたけし君だった。

「クイズに正解したら、カボチャの入ったミニチャーハンを無料プレゼント。どうだ？ お得だろ？ タケルパパはなぜ解きを作るのが仕事だつて聞いてたからさ、早速お願いしてみたんだ」

「なるほど。面白いなぞですね。答えは——」

ひろし君はぼくのお父さんが徹夜で考えたなぞをあつさりと解いてしまった。

「……ああ、なるほど。そういうことか」

たけし君のお父さんが感心したようにうなづく。

「え……そんなにかんたんに解けちゃつて大丈夫？ もうちよつと難しい問題にしたほうがよくないかな？ あつという間に、カボチャ入りチャーハンがなくなつちやうんじゃ」

たけし君が不安そうな表情をうかべる。

「いいんだよ。大勢の人にうちの自慢のチャーハンを知ってもらうことが最大の目的なんだから」

たけし君のお父さんはいきおいよく息子の背中をたたいた。

「それに、ひろし君ほど頭の切れるお客さんはそうそういないだろうし」

それはまあ確かにそうだ。

実際、ナオちゃんはひろし君になぞの解説をしてもらつても、まだよくわかつていないみたいだ。

「本当にありがとうございます。それではこのなぞ解きを使わせていただくことにしま——」

「もうやめてください！」

たけし君のお父さんの言葉をさえぎったのは、深刻そうな話し合いを続けていたハルナ先生だった。

「パラサイトバグを飲んでブルーデーモンになれ？ そんな話、受け入れられるはずがありません」